女神の末裔　第四章

唸りをあげて矢が空を裂き、あやまたずに兎の背から腹を貫いた。

「土蜘蛛の弓の見事さよ」

稗田阿礼が感嘆の声をあげた。サヤは微笑み、兎を拾い上げ矢を抜き、血を拭って箙に収めた。それから短剣で腹を裂き、臓物を抜き取って葛の葉に乗せた。皮を剥ぎ、肉を削いだ。

肉は焼いて食う。アダヒメは火打ち石で火を起こした。

「汝も食え」

サヤは阿礼に葛の葉を差し出した。血に塗れた生の臓物が匂った。阿礼は顔を背け、要らぬ、と言った。サヤは不思議そうな顔をした。臓物は滋養がある。火に炙れば滋養は減る。山中を旅するためにも精をつけねばならぬ。山人の知恵であった。

ヤマトに生まれ、米と菜、川魚を食して育った稗田阿礼は、黙って炙った肉を齧るのみであった。サヤも強いて勧めなかった。

陽が没しようとしていた。サヤは、兎の皮をなめしながら言った。

「明日は川に出る。樹を伐って筏を作り、川を下れば国栖に出ると聞いている」

「サヤは国栖へ行くのは初めてであったな」

阿礼が問うた。

「然り」
「この百年、国栖と土蜘蛛の間に交わりは全くなかったのか」
「昔はかぼそくも交わりがあったらしい。だがいつしかそれも途絶えた。吾の祖母が生きていたころ、国栖を訪れたことがあったが誰もいなかった。南に移ったようだ」
「南へ」
「それ以来、国栖の者を見た者はいない。長い旅になるだろう」

五本の杉を伐り倒して筏と櫂を作るのに一日かかった。その夜は川べりで寝た。
夜が明けると、三人の女たちは筏を川に浮かべた。川は下るにつれて深さを増し、翡翠のような濃い緑色に変じた。川の両側は延々と切り立った崖が続いた。
その日の夜は筏をつなぎ止める場所がなく、交代で寝ずの番をして夜通し川を下った。
次の夜は、僅かに川に突き出た岩に筏を繋いで休んだ。
翌日の昼頃、右の岸べの崖が途絶え、川原が見えた。
「あがってみよう」
サヤが言った。川原の向こうは森になっていた。
「森を越えれば邑があるかもしれぬ」
三人は櫂を動かして川原へと漕ぎ寄せた。
そのとき、対岸の川原の茂みから糸のようなものが数本、空に舞い上がり、勢い良く上

昇し、下降して筏に向かって落ちて来た。
「伏せよ！」
サヤは叫んだ。三人の女たちは、筏に腹這いになった。筏が大きく揺れ、阿礼は川に落ちそうになってアダヒメに裾を掴まれた。筏の真近くの川面に矢が突き刺さり、いったん潜ってすぐに浮かんだ。
すぐさま、シュッと音を立てて、また矢が飛んできた。今度は倍の数だった。アダヒメは櫂をあげて矢を防いだ。三本の矢が櫂に垂直に突き刺さった。
「う……」
アダヒメは左腕に火で炙られたような熱さを感じた。矢が一本、ふかぶかと左の二の腕を縫っていた。
引き抜く暇もなく、矢は次々と雨のように筏に降ってきた。アダヒメは背に負った剣に手をかけた。
「阿礼！　三つの櫂を楯にして伏せていよ」
アダヒメは叫び、サヤに眼配せをした。サヤは頷いた。

川原の茂みに、藤蔓の甲冑に獣皮をまとった十人の兵が弓を構えていた。彼らは、三人の女のうち、二人が川に落ちるのを見た。
筏から滑り落ちた女たちは、そのまま浮かびあがってこなかった。頭らしい兵が何か叫

んだ。兵たちは矢を射るのを止めた。二人の兵が、川へ入り、水を撥ね上げながら筏に向かった。
彼らの腹が川面の下に隠れたとき、二つの水飛沫が高くあがった。たちまち、二人の兵は血を噴きながら倒れ、川に沈んだ。
アダヒメとサヤが剣を抜き、雄叫びをあげ水を撥ね飛ばしながら川原に突進してきた。兵たちは慌てて弓に矢をつがえようとしたが、つがえ終わった時には二人の兵の首が川原に転がった。兵たちは弓を捨てて剣の柄に手をかけた。抜く暇もなく四人の兵が倒された。
残る二人は悲鳴をあげ、森へ逃げ込もうと走った。一人は躓いて転んだ。サヤが剣を降り下ろした。兵は危うく剣をあげて受け止めたが、体をのけ反らせ、絶叫した。サヤは兵の股間を踏みつけていた。兵の頭頂に剣が降り下ろされ、頭蓋が砕け、顔が真二つに割れた。
もう一人の兵は、森の樹にとりついた瞬間、背後からアダヒメの剣で刺された。切っ先は背骨を砕き、内臓を破り、腹から飛び出して杉の幹に突き刺さった。
「汝は国栖の者か」
死に切れず、もがき苦しむ兵の耳元でアダヒメは怒鳴った。
「言え！　国栖はいずくか」
兵は答えなかった。アダヒメは苛立ち、背後から兵の睾丸をつかんでひねりあげた。兵は泣き叫び、体が激しく痙攣した。

不意に、アダヒメは全身の力が抜けてゆくのを感じた。視界が暗くなり、指先の感覚が薄れ、脚から骨が消え失せたように膝が揺れた。
毒だ……。
左腕に刺さったままの矢の鏃に毒が塗ってあったに違いない。
「言え……」
アダヒメは全身に回ってゆく毒に抗うように叫んだ。声は嗄れていた。
「国栖は……」
アダヒメは倒れた。サヤが駆けつけたとき、彼女の掌に、ひきちぎられた陰嚢と潰れた睾丸が握りしめられていた。だらりと手を垂れた兵の股間から滝のように血が噴き落ちていた。
「アダヒメ！」
サヤは激しくアダヒメを揺り動かした。アダヒメは眼を閉じたまま動かなかった。
不意にサヤの周囲を人影が囲んだ。見上げると、十数人の獣皮を纏った兵たちが弓に矢をつがえてサヤを取り囲んでいた。
「何者だ」
女の声だった。みな女の兵だった。声をかけた女は、獣皮ではなく薄青い貫頭衣を纏い、胴に巻いた鉄の甲冑が豊かな乳房を押し上げていた。すらりと背が高い。
「土蜘蛛の長の娘、サヤ」

サヤは答えた。女は言った。
「吾は国栖の女軍の長、イナビ（伊那比）」
「国栖！」
背後でいつの間にか川からあがってきた稗田阿礼か叫んだ。イナビが問うた。
「汝は？」
「ヤマトの史人、稗田阿礼」
阿礼はまろぶように走り寄って、イナビの膝にかじりついた。
「吾等はヤマトより来た。ヤマトの大王家がまことに日輪の女神の末裔なるか否かを確かめに来た。国栖ならばまことの史を知っている。吾等を国栖の邑へと連れてゆけ」
イナビは困惑したように阿礼を見やり、木の根に伏せているアダヒメに視線を移した。

森のあちこちに屍が転がっていた。
「森を抜けると邑がある」
イナビは背後を歩くサヤと阿礼に言った。二人の女兵がアダヒメを担ぎ、他の女兵たちは油断なく土蜘蛛とヤマトの史人に視線を注ぎながらついてきた。
「国栖に服従しなかった故をもって吾等が討ち滅ぼした」
阿礼が足を止めて地面を凝視した。赤子を抱いた若い母親が倒れていた。ともに、剣に刺し貫かれ、夥しく流された血は乾ききっていなかった。

「老人から赤子にいたるまで、悉く殺せとの王の命だ。森に逃げ込んだ邑の者どもを追って川原に来た」
イナビは一瞬眼を伏せ、屍から視線を逸らして口早に言った。
「男軍どもは、汝等を筏で逃げようとした邑の者と間違えたのであろう」
森を抜けると、十数のみすぼらしい住居が立ち並ぶ小さな家があった。殺戮された死骸が転がっていた。
「王の命故にか」
阿礼が訊ねた。イナビは答えなかった。阿礼は再び問うた。
「国栖の王は、服従せぬ邑は童まで殺すのか」
イナビは阿礼の視線から顔をそらし、アダヒメを担いでいた女兵に命じた。
「ヤマトの皇女の手当てをせよ」
女兵二人は懐から薬草を取り出し、口で噛みほぐしてアダヒメの傷口に塗った。
「猛毒だ」
イナビは呟くように言った。
「助からぬかもしれぬ」

だが、アダヒメは死ななかった。
邑を出ると原始より人の手の入ったことのない樹海に覆われ昼も日が差さぬ山道が続い

た。二日間歩いて樹海を抜けると沼地だった。一行は泥に塗(まみ)れて腰までつかる沼を越えた。
沼地を越えると、切り立った崖が聳(そび)え立っていた。最初に攀(よ)じ登った五人の女兵が、アダヒメの体を太縄で釣り上げた。全員が崖を登り切ったときには日が落ちていた。
「剛(たけ)きヤマトの皇女(ひめみこ)かな」
イナビは感嘆したように、彼女の傍らに横たえられたアダヒメを見下ろして呟いた。アダヒメは時折、唸り声をあげていた。額に汗が浮かんでいた。
夜が更けていた。山中の洞窟に火を焚(た)いて休んだ。入口に寝ずの番に立った二人を除き、女兵たちは寝息をたてていた。
「国栖の矢で射られれば、常人ならば半日で命を落とす」
外の闇で風が樹を鳴らしていた。時折、風音に混じって砂を撒(ま)くような音が響いてきた。
「何の音だ」
サヤが問うた。
「さきほどからずっと鳴っている」
イナビは微笑んだ。
「夜が明ければ分かる。土蜘蛛やヤマトの者は見たこともあるまい」

かすかに歌声が響いていた。
あの声は……蹶速(けはや)。

必死に重い瞼(まぶた)を開けた。暗闇を通して微かに光が見えた。
蹶速の兄か……。
舌を動かした。砂を呑んだように喉が熱く乾き、声は音にならなかった。
水を……。蹶速の兄よ……。水が欲しい……。
つづいて女童の歌声が唱和した。
当麻(たいま)の林のなかの泉で蹶速の兄がうたった歌。その傍らに、小さな膝に顎(あご)を乗せて聞き入り、いつしか声を合わせている女童は……。
ヤマトの王宮に、出雲(いずも)より力自慢の相撲人(すまいびと)が来ている。
彼を倒せば、王宮の兵長(いくさのおさ)に取り立ててられる。
吾も行きたい。
汝は乙女ではないか。
吾は蹶速の兄よりも強い。
幼い頃から蹶速の兄に武を習った。今では蹶速の兄にも負けない。
血の匂い。出雲の大きな醜男が蹶速の兄の胸板を踏んでいる。
骨の砕ける音。再び血の匂い。
旦波(たにわ)へ行け！
大王の声だ。
玖賀耳(くがみみ)。

女か。
舌なめずりをして、剛(こわ)い毛の群れ生えた手が陰(ほと)を這いまわる。
絶叫。
幾本もの剣が閃(きらめ)く。血を吹いて倒れる旦波の兵たち。
大王(おおきみ)よ。
玖賀耳の首。
吾は……
吾は……大王の娘。

瞼が開いた。光が幾千本もの針となってアダヒメの網膜を射た。
掌で眼を覆った。涙が溢れ、止まらなかった。
やっと痛みが収まった。瞼をそろそろと開けてみた。
洞窟のなかだった。入口からさかんに眩しい光が差し込んでいた。周囲を見回した。傍らに、焚き火の跡がかすかに煙をあげていた。獣皮を纏(まと)った女たちが、太股(ふともも)をだらしなくさらけ出し、そこかしこに伏せていた。
アダヒメはよろよろと立ち上がった。体が熱い。重い。
よろめきながら、膝を動かした。洞窟の壁にもたれ、這うように入口を出た。
ごうっと風が唸るように鳴り、アダヒメの縮れ毛を吹き飛ばした。広い額が露わになった。

アダヒメは眼を見開いた。
洞窟の外の林の彼方に青い光が拡がっていた。
林の向こうは切り立った崖だった。崖の真下に、白い飛沫(しぶき)をあげて水がうねっていた。
群青(ぐんじょう)の水が遙か彼方にまで繋がり、昇る太陽の光を受けて輝いていた。
これは……何？
再び視界を闇が覆った。アダヒメは倒れた。

「やはり」
イナビは微笑んだ。
「海を見たことは、やはりないのか」
崖を降りると浜だった。浜は狭く、すぐ山が迫っていた。
足元に打ち寄せる波飛沫を稗田阿礼とサヤはこわごわと見つめていた。
「話には聞いた……」
サヤは呻(うめ)くように言った。阿礼が問うた。
「国栖は南に移ったと聞いたが、山を降りて海に出たのか」
「吾の父が生きていた頃、この地へ来たと聞いた」
イナビは答えた。

その傍らにアダヒメが伏せていた。女兵が泉で酌んだ水を布に浸し、額に押し当てていた。

「今の国栖の王の祖父はこの地の海人(あまびと)たちを従えた。海を越えて他のクニと品を交わし富み栄えた。三千の民を従え三百の兵を養っている」

「三百の兵」

サヤは心踊った。ヤマトの大王家の兵は五百。百の土蜘蛛の兵と、三百の国栖の兵を合わせれば十分に対抗しうる。

「しかし今の王は動くまい」

イナビは俯いた。

「先の王ならば、とは思うが」

「先の王ならば？」

阿礼が問うた。イナビは答えなかった。

辿(たど)り着いた先に集落があった。日が沈みかけていた。粗末な家々が並び、浜には丸木舟が打ち上げられていた。漁を終えた半裸の男たちが、縄で船を引いて浜へ揚げていた。出迎えた女たちが、網に詰まった魚介を取り出し、石包丁で魚の腹を割いて臓物(ぞうもつ)を取り出し、口に木串を通して乾物にしていた。

「海にも魚が棲(す)むのか」

川魚しか知らぬサヤが問い、女兵たちが笑った。

集落を過ぎると、城柵に囲まれたなか、木組みのしっかりとした宅や櫓(やぐら)が並んでいた。城柵には兵たちが矛(ほこ)を構えて固め、国栖の都処(みやこ)と見えた。北は樹の生い茂った山で、その中央を切り裂くように石段が頂上まで続いている。イナビの姿を見ると兵たちが門を開いた。

石段の真下は広場になっていた。篝(かが)り火(び)が数多く用意され、兵がびしりと円を作って立ち並んでいた。イナビに命ぜられ、女兵が二人、石段を駆け上がっていった。

「祭りだ」

「祭り？」

阿礼が問うと、イナビは物憂げに答えた。

「日が没するとともに王が石段を降りて現れる」

石段を昇った先に王の住まう宮がある、とイナビは言った。こんもりとぶ厚い樹々に覆われて木造りの宮が垣間見えた。

「国栖の祭りとは如何なるものか」

阿礼が咳き込むように訊ねた。イナビが躊躇(ためら)っているうちに、女兵が石段を降りてきてイナビに耳打ちした。イナビは阿礼とサヤを見て言った。

「今宵(こよい)は祭り故、汝等を如何するかは明日決める。ともかく吾が宅へ」

イナビは、アダヒメを運ぶ二人の女兵を除き軍を解散させ、広場に間近い宅へと招いた。

丸太を組み合わせた簡素な宅であった。イナビは一人の女兵を帰らせ、もう一人に、
「ヤト」
と呼びかけた。ヤトと呼ばれた丸顔の乙女は心得顔(こころえがお)で床に蔀(しとみ)を引いてアダヒメを寝かせ、厚い布をかけた。
「一族の者はいないのか」
阿礼が訊ねた。
「ヤトと二人で住んでいる」
イナビは浜の漁民の出であった。十歳の頃、津波に襲われて一族のなかでただ一人生き残り、先代の王がこれを哀れんで王宮の女兵とした。ヤトも同じような身の上であった。イナビは彼女に身の回りの世話をさせていた。
「祭りを見たい」
阿礼は言った。イナビは気が進まぬようであった。
「今宵は休め」
「吾は史人(ふひと)である」
阿礼は言い張った。
「史人は全てを見る。見るのみである」
イナビは「祭りに剣を帯びることは許されない」と剣を腰から外して床に置き、ヤトにアダヒメを看ているよう命じ、宅を出た。

すでに日は落ち、国栖の地は闇に覆われていた。篝り火が焚(た)かれて魚脂の匂いがたちこめ、酒に酔った国栖の豪族たちの赤ら顔を照らしだしていた。楽人たちが叩き鳴らす鼓の音が、ひとびとの酔態を勢いづけていた。
戯れて、サヤとイナビに抱きついてきたものがいた。たちまち股間を蹴り上げられ地に伏して悶絶したが気にとめる者もいない。阿礼は、祭りの全てを脳に記そうとするように、眼を輝かせて楽人の奏を見つめたり、酒や肴(さかな)を覗き込んだりしていた。
突然、楽の調子が変わった。人々がいっせいに平伏した。
石段より、紫の裾長(すそなが)の衣を羽織り、巨漢を二人従えた貧相な男が降りてきた。太い眉に大きな眼だが、皺が縦横に走り、黄ばんだ肌の色や頬に浮かぶ染(し)みがひどく目立った。
「国栖の王」
ひとびとに遅れてしゃがみこんだ阿礼とサヤに、イナビが囁いた。
国栖の王はゆっくりと石段を降り、熊の毛皮を敷いた座に着き、せわしなく周囲を見回した。数名の者が走り寄り、杯を手渡し、酒を注ぎ、耳打ちした。
「イナビ」
王が顎をあげ、嗄れ声で呼んだ。イナビは王の前に進み出た。
「阿陀野(あだの)の邑人は悉(ことごと)く誅(ちゅう)したか」
「然(しか)り」

「赤子に至るまでか」
王はどろりと濁った眼でイナビを見据えた。
「然り」
王は頷き、首にかけた匂玉(まがたま)を放り出した。輪に繋いだ匂玉はイナビの足元にかすかな土埃をあげた。イナビは拾い上げ、おし頂いた。
王が片手をあげた。再び楽の調子が変わった。兵たちに突き飛ばされるようにして痩せた半裸の男が広場に連れ出された。王の背後に控えていた巨漢たちが衣を脱ぎ、広場に進み出た。豪族たちがいっせいに手を叩いた。
男は巨漢を見上げ、怯えたように四囲を見回した。豪族たちは口々にわめき男に絶望的な戦いを強要した。巨漢はじっと腕組みをしている。
男は意を決したように立ち上がった。王が身を乗り出した。男は奇声を発し、巨漢に飛び掛かった。巨漢の松の幹のように節くれだった腕がうなりをあげた。半裸の男は吹き飛ばされ、土にまみれて転がった。鼻が折れ、血が滴(したた)っていた。豪族たちはまたも歓声をあげた。
男は立ち上がった。だが、立ち上がったまま、凍りついたように動かなかった。膝がかすかに揺れていた。巨漢はゆっくりと男に近寄った。男は、足元の土をつかんで投げつけた。巨漢が怯んだ。男は突進し、巨漢の腹部に拳を叩きつけた。二度三度四度、渾身(こんしん)の力で殴った。眼を拭った巨漢は薄笑いを浮かべて男を見下ろし、やがて両手を組んで天に差

し上げ、降り下ろした。
がっと音が響いた。半裸の男は背骨を砕かれ、血反吐(ちへど)をはいて地に伏した。巨漢は、男の髪の毛をつかんで引っ張り上げた。そして、左右の腕と脚を折った。半裸の男は、おかしな形に捩(ね)じ曲げられた。巨漢はさらに半裸の男の頭をつかんで地に叩きつけた。額から血が噴き出し眼球や脳が飛び出した。
豪族たちは酒と血に酔って踊り狂った。イナビはわずかに顔を背けた。サヤは呆然と見つめていた。
「あの殺された男は何者か」
阿礼がかすかに震える声で訊ねた。
「罪人だ」
「何の罪か」
「王が罪人と言えば、その者は罪人になる」
国栖の王は、杯の酒を飲み干し、つまらなそうな顔でもう一人の巨漢を眼で促した。
さらにもう一人の罪人が広場に連れ出され、もう一人の巨漢と戦わされ、同じ運命を辿った。広場は血に塗れ、臓物の匂いがたちこめた。豪族たちが憑かれたように、そうせねばならぬかのように立ち騒ぐなか、国栖の王はうつろな眼でひたすらに酒を喉に流し込んでいた。
もう一人の罪人が広場に連れだされようとしていた。すると、王が立ち上がり、兵たち

に退するよう手を振った。兵たちは罪人を押し出すようにして退がった。王は広場の中央へふらふらと歩み出た。
「イナビ」
王が叫んだ。イナビが前に進み出た。
「汝の傍らにおる女は何者か」
王の濁った眼が、阿礼とサヤを見据えていた。
「土蜘蛛とヤマトの史人」
「土蜘蛛」
王の白濁した眼に好奇心とかすかな怯えが混ざった。
「土蜘蛛の乙女よ。来よ」
サヤはイナビを見た。イナビは、かすかに顎を動かして頷いた。サヤは王の傍らに進み出て膝をついた。王は煩わしげに手を振ってイナビを追い払った。サヤは一人、広場の中央で、国栖の王を前にして固い面持ちで上目遣いに俯いた。
「これが土蜘蛛か」
王の唇が醜く歪んだ。饐えた匂いが漂って来た。サヤは眼を逸らした。
「土蜘蛛の乙女よ」
王は、巨漢の一人を手招きした。巨漢は汗を拭いながら進み出た。
「戦え」

ぼそりと言うと、王は熊皮の座へと戻り、だらしなく姿勢を崩した。サヤは困惑してイナビを見た。イナビが立ち上がるより早く、巨漢がサヤの胸を拳で突いた。
「うっ！」
サヤは呻き、両腕で胸を抱えて体を折った。巨漢はすかさず右脚をサヤの脇腹に叩きつけた。サヤはあやうくかわして尻餅をついた。
歓声があがった。巨漢はにやりと笑い間合いを詰めた。サヤは左手でちぎれそうに痛む乳房を抱えつつ、じりじりと後ずさった。
イナビは立ち上がり、叫んだ。
「王よ！」
みながいっせいにイナビを見た。王は見なかった。イナビに注がれ、続いて王を窺った豪族たちの視線は、すぐに追い詰められた乙女と追い詰める巨漢に向けられた。
「疾(と)く、せよ！」
一人の豪族が叫んだ。もう一人が唱和した。
「疾く殺せ！　疾く引き裂け！」
広場を怒号が覆った。だが、巨漢は間合いを詰めるだけで、何もできずにいた。一見追い詰められているサヤは、油断なく右手を突き出して、巨漢が仕掛けるであろう全てに応じられる姿勢でいた。巨漢にはそれが分かっていた。
巨漢の額に脂汗が浮かんだ。サヤの唇に微笑が浮かんだ。

「ぐわぁぁぁぁぁぁ！」
巨漢が咆哮した。右の足が地を這うように、サヤの太股を狙った。サヤの体が跳躍した。くるりと前倒しに回転し、巨漢の背後に回った。巨漢は狼狽し、振り向いた。サヤはすでに立っていた。白い右足が跳ね上がった。
「ぐっ！」
巨漢が体を折った。サヤの爪先が巨漢の睾丸に叩きつけられた。
王が立ち上がった。手から杯を取り落とした。
豪族たちが息を飲んだ。
一瞬の出来事だった。サヤの右足が再び相手の股間に打ち込まれていた。
巨漢の体が硬直した。口をだらしなく開き、両手が痛めつけられた睾丸に添えられ、上体が今にも崩れ落ちそうに揺らいでいた。
サヤのしなやかな足が再び宙を舞った。足の甲が巨漢の鼻面に叩きつけられた。巨漢は左手で股間を、右手で顔面を抑え、膝が地に着いた。
サヤの体が沈んだ。同時に、右手が突き上げられた。突き出した二本の指が、巨漢の眼球を抉った。
「ぎゃあああああ！」
巨漢はどうと横倒しに倒れた。血が溢れ出る顔面と股間を手で抑え、狂ったように地面を転げ回った。サヤはじっと巨漢の様子を見守った。巨漢は立ち上がろうともがいた。や

っと、片膝をつき、赤く染まった顔をあげた。その瞬間、サヤの足の甲が巨漢の喉を打った。
ぐしゃっと骨が砕ける音がした。巨漢は喉を蹴り潰され、脛骨を折られ、どうと仰向けに倒れて動かなくなった。
サヤは肩で息をしながら巨漢を見つめた。小山のように盛り上がった腹部の微かな動きが止まるのを見て、膝を突き、両手で己が体を抱えこむようにうずくまった。
手を打つ音がした。
国栖の王が、微笑みながらゆっくりと左右の掌を打ち合わせていた。豪族の視線は、一個の物体と化して動かなくなった巨漢と、一人満足そうな国栖の王の間を往復した。
王が、小柄な乙女に朋輩を倒され、呆然と口を開いているもう一人の巨漢の肩を叩いて立ち上がった。ゆっくりとサヤに近づき、
「土蜘蛛の乙女よ」
と言った。サヤは荒い息を整えつつ国栖の王を見た。唇にかすかな笑みが湛えられていた。だが、細く赤い筋が幾重にも走る王の眼は笑っていなかった。王は首にかけた翡翠を引きちぎり、サヤに与えた。サヤは一礼し、阿礼やイナビの元へ歩いた。阿礼は身を固くして立っていた。イナビは、今にも弾けそうに怒りに身を震わせているサヤに歩み寄り、その肩を抱いた。
「ヤマトの史人よ」

王が叫んだ。阿礼はびくりと体を震わせ、王を見た。王が手招きしていた。

「王は病(や)んでいる」

イナビはサヤの肩を強く抱きしめながら呟いた。サヤの瞳がイナビを見た。

「王は……病んでいる」

イナビは唇を噛みしめた。

阿礼は立ちすくんでいた。その背後に国栖の兵が立った。阿礼はこわごわと脚を動かし、歩き出した。王は振り向き、もう一人の巨漢を手招きした。

阿礼は立ち止まった。巨漢は王の招くままに広場の中央へと歩み出た。

「戦え」

王は、阿礼を見て言った。阿礼が眼を見開き、救いを求めてイナビとサヤを見やった。

「王よ」

イナビが叫んだ。

「その乙女は女兵ではない、史人である」

「黙れ！」

王は体を折り曲げ、両手の拳を握りしめて怒鳴った。嗄(しわが)れた声が、壺が割れ砕けたように響いた。ひとびとは息を呑んだ。

「王が戦えと言う！　戦わねばならぬ！」

恐怖を隠せず肩で息をしているか細い乙女と、小山のような巨漢。結果は明らかであった。王は、巨漢が乙女の四肢をへし折り、引きちぎり、生きながら血まみれの肉片と臓物を地にばら蒔(ま)くのを望んでいるとしか思えなかった。

手を止めていた楽人が再び鼓を鳴らし始めた。ひとびとは再び、口々にわめき、手を叩き鳴らし、広場は異様な喧騒(けんそう)に包まれた。

巨漢は阿礼にゆっくりと歩み寄った。痘痕(あばた)だらけの四角い顔が奇妙に歪んでいた。彼は王の望みを十分に理解し、王の欲望を己の欲望に転じていた。

阿礼は巨漢を見上げた。早くも眼に涙が浮かび、頬から血の気が引き、風に煽(あお)られた葦のように震えていた。

巨漢が軽く腕を突き出した。指先が阿礼の鎖骨のあたりに触れた。阿礼は悲鳴をあげて地にまろび、己が体を抱くようにして身を竦めた。裾がはだけ、細い脚が露になった。涙から滴(したた)りおちて地を濡らした。

ひとびとがどっと哄笑した。追い詰められ、涙を流すより術のない乙女の姿は、ひとびとの加虐的な嗜好をくすぐった。心ある者も自らの感覚を麻痺させ、笑い声をあげていた。

イナビは、腕に抱いている小柄なサヤが王と巨漢を凝視しているのに気づいた。ちょっとでも腕の力を緩めれば、彼女は広場に飛び出して、阿礼を救うだろう。

巨漢の腕が阿礼の襟首をつかんで持ち上げた。阿礼の抗いはなんの効も奏しなかった。彼女の体が宙に浮いた。息が詰まった。脚をばたつかせた。

「離せ！」
阿礼が泣き叫んだ。
「離さぬと……」
「気丈なヤマトの乙女よ」
国栖の王が冷酷な笑みを浮かべた。左手に杯を持ち、右手は懐に差し入れられていた。己が男根を弄んでいるようであった。
巨漢は阿礼をつかんだ腕を振り回した。阿礼の体が巨漢を軸に回転した。地面に叩きつけられた阿礼は、うつ伏せに伏したまま動かなくなった。
巨漢が腰に巻き付けていた衣をとった。ひとびとが喝采した。男根が天に向かって聳え立っていた。巨漢はゆっくりと腰を突き出して阿礼に歩み寄り、髪の毛をつかんで顔を持ち上げた。阿礼の瞼は閉じられ、口がだらしなく開いていた。意識を失っていた。巨漢は阿礼の顔を自分の股間に押しつけた。阿礼が苦しげにむせた。男根が阿礼の唇に突き刺さっていた。
巨漢は腰を前後に動かし始めた。ひとびとの興奮は絶頂に達していた。楽の音はいちだんと賑やかに奏でられた。王は身を乗り出し、眼を見開いて淫らな光景を見つめていた。
サヤの全身の筋肉がわなないていた。イナビは渾身の力で土蜘蛛の乙女を抱きしめた。王の右手は忙しく動いていた。巨漢が、あるいは王が精を漏らして興奮が鎮まれば、あるいは阿礼は殺されずに済むかもしれない。イナビは一縷の望みをそこにかけた。

巨漢の男根が深く差し込まれる度に、阿礼は苦しげに呻いた。閉じられていた瞼がしだいに開き、大きく見開かれた。
巨漢がのけぞり哮咆した。ひとびとがどっと歓声をあげた。巨漢が精を漏らした、そう思ったのだが、巨漢の男根をくわえた阿礼の唇から鮮血が迸ったとき、ひとびとの歓声がやんだ。
巨漢は滝のように涙を流しながら阿礼の小さな頭を両手でつかんで引き剥がそうとした。だが阿礼は巨漢の男根に噛みつき、両手で陰嚢を握りしめて離さなかった。巨漢は泣きわめきながら苦痛に身を捩り、激しく顔を左右に振った。
王が立ち上がった。
巨漢は両手を高く天に差し上げ、絶望的な叫びを発し、どうと仰向けに倒れた。
阿礼が顔をあげた。口から血が滴り、顔を歪めて嗚咽が洩れていた。
巨漢の男根は天に向かって突き上げたまま、半ほどで折れ皮一枚を残して垂れ下がっていた。断面から、血と白濁した精が盛んに噴き上げられていた。陰嚢は今にも裂けそうに赤黒く膨張していた。阿礼は、巨漢の男根を噛み千切り、二つの睾丸を握り潰したのである。
「イナビ！」
王は穏やかな顔つきで女兵の長を呼んだ。イナビが振り向いたとき、サヤは弾かれたように飛び出し、虚脱して啜り泣く阿礼を抱いた。阿礼は、サヤの胸に顔を埋めるようにし

て倒れこみ、号泣した。
「明朝、謁見を許す。ヤマトと土蜘蛛の乙女を連れて来よ」
王はくるりと踵を返し、石段を登っていった。兵たちが慌ただしく広場に駆け寄り、無残な肉塊と化した二人の巨漢を運び去った。
「サヤ」
イナビは、阿礼を抱き締めたままうずくまっているサヤの肩に手を掛けた。サヤは虚空を睨んで呟いた。
「国栖の王は病んでいる」
「然り」
イナビは頷いた。
「吾が宅へ帰ろう」
豪族たちが虚脱したようにぞろぞろと思い思いの方向へと歩いていた。無秩序な人の群れをかき分けるように三人の女は歩いた。その行く手を防ぐように人影が立った。
「剛き乙女どもかな」
サヤの肩に顔を埋めていた阿礼が顔をあげ、息を呑んだ。
「オウスの皇子……」